備陽史探訪
第37号
発行
備陽史探訪の会
福山市西深津町7-2-7
印刷所　塩出印刷

## 御調町史跡めぐりに参加して

小林　良子

五月の例会として、五月三十日（昨日までの悪天候が、嘘の様な五月晴れの一日）に、貸切バスで御調町史跡めぐりを致しました。講師の方は、探訪の会の会員で、御調郡郷土文化研究会事務局長を務めておられる、住貞義量氏で、氏の故郷である御調に対する深い情熱と思い入れは格別で、ユーモアを交めた楽しい案内に終始していただきました。

福山からバスに揺られること四十分、たどり着いた御調町は、私が想像していた以上に人情味豊かな素朴な里で、のどかで優しい表情で、私達を迎えてくれました。生まれて初めて足を運ぶ御調町でしたが、教育委員会作製の立派なパンフレットを見て、町自慢のふれあいの里にてスライドを観ながらの文化財の説明を聞いて、御調に対する興味が高まった後、刀匠で有る川崎貞行氏を訪ねました。初めてお会いする氏の私達に対する表情は柔和で、そのまなざしは暖かいにも関わらず、一度刀と向き合うと厳しいまで真剣そのもので内に秘む強固な精神力を思わせました。私の大切な友の一人で有る陶芸家は、いつも口ぐせの様に『芸術家たる者は心をいつも清く持っていなければならない。心が濁れば、己が作り出す作品も濁るから。自分の心の中に四季を持ち、小川が流れ、木々は緑をつけ花は咲きこぼれ、小鳥はさえずっている様な、そんな心象風景を大事にしたい』と言っていたけれども、川崎氏のピンと伸び切った背筋を背後から見ながら、芸術家という存在の内面に思いを馳せていました。私達に見せて下さった氏の鍛練された刀は、薄暗い仕事場の中で冷たく光り、鋭利そのものでしたけれどやはり見るだけではつまりません。その切れ味をこの目で確かめてみなければ名刀も形無し、庭先に咲くお花でも少し切って下されば私は氏をもっと好きになっていたでしょう。

しかし、六十年もの間刀と取り組んでおられる氏の人生は、私には想像を絶する境地ですが、日本刀という魅力的な文化財には若年の私でも心を魅かれます。封建時代の女性は嫁ぐ際に、嫁入道具の一つとして懐剣を持ち非常時には死をも覚悟で嫁いだと聞いています。かの三島由起夫の描く所の〝憂国〟もその類の話をテーマにしています。内容は二・二六事件を題材にとり、事件発生以来親友が叛乱軍に加入した事に懊悩し、皇軍相撃の事態必至となってゆく情勢に痛憤した主人公武山中尉が自宅にて軍刀で割腹自殺を遂げ、その夫人も又、夫君に殉じて、嫁ぐ際持参した懐剣で自決を遂げたーという三島氏好む所の大得意なテーマですが、三従の教えも、そして戦前の教育勅語も無関係な教育を受けた私にも、氏の鍛練した懐剣を見せていただきながら、これをいただけるのなら、刀の澄明な光に誘われて、そんな往生も無くはないなと不遜にも考えていました。

昼食は、再びふれあいの里に戻り、自然の中でいただき、そして午後は、住貞氏に、照源寺、歴史民俗資料館、本郷平廃寺跡、円光寺、御調ダムと次々に案内していただきました。照源寺では国指定重要文化財の木造涅槃像を拝観し、かの沖雅也さんの遺書の「涅槃で待つ」という言葉を思い出しましたが、全身、黒漆金箔で大変に美しいものでした。でもどうして日本人は重要文化財というとすぐ倉の中に入れ、柵をして鍵をかけてしまうのでしょう。仏様はより多くの方に拝まれてこそ本望と鎌倉時代にこれを彫った仏師は願ったに相違ないのにと哀しく思います。

歴史民俗資料館も昔懐しい木造校舎の雰囲気で、半々に素敵な民芸品も飾られ、特に私はおひな様の掛軸が大変気に入りました。

全体的に見所が有り、住貞氏の郷土愛がこちら側にも十分に伝わり、予想以上に楽しい一日でした。

探訪の会に入会して、この様な形で郷土の史跡と慣れ親しむ事が出来、倖せに思います。

又、次の例会を、楽しみにしています。

# 甲奴郡史跡めぐり異聞

WXY生

快晴の天候に恵まれなかったのが幸した例会だった。一般的には風雨の悪天候が嫌われるが、一方で絶好の晴天などと云って晴れることが好まれる。しかし時と場合によっては、晴れたり、曇ったり、また降ったり…と適当に繰返してくれる猫の目の様な一日が好天だったりすることもあろう。一日中降り続ける雨天は大体の催しで敬遠されるが、もう既にシーズンを終えた田植は一日中雨が降るその悪天候の日が最適とされるのは云うまでもない。

種々の催しが成功か、不成功に終ったかを判定するその大きなカギを握るものとして当日の天候がかなりの部分で左右する。甲奴郡の田総氏遺跡を訪ねた当日の例会が成功を治めた一つに、降るかと思えば晴れ、照りつけて暑いかと思えばオシめりの小雨を降らせた日和を挙げてもいいのではあるまいか。将に天を味方につけることで成功させた実例と云える。

しかし付録的に訪ねた最初の目的地・有福山城山頂（本丸跡）での降雨ばかりは、福山を発ち始めにバスを降りた場所だけに、その後の訪問先がどうなることかと不安を抱いたのは小生だけでなかろう。傘を用意した参加者がいたのにはその周到さに驚かされもしたが、それが一層天候の不安をつのらせるものとなった。

ところでこの有福城は本丸までの距離が麓から六〇〇米とあって、その上かなり歩きづらい難儀な登山道として紹介されていたが、意外や意外、拍子抜けするほどの楽な道で、小生など他の山城と間違えたかとさえ疑った次第、それもその筈で、登山道を遮っていた木や草は有福城々主の末えいに当る竹内さんの好意で立派に刈取られ、その上道床も補修した跡がうかがわれ、大きな木の切株も残されていたのには頭が下った。聞けば竹内さんは当日の講師である竹島さんの友人とかで、竹内さんの労苦を感謝するのは下より、竹島さんの人徳が竹内さんの好意につながったものと推測され、改めて竹島さんの恩深い人間性に触れた様な気がした訳です。

竹島講師の讃美はこのくらいにしますが、有福城跡を経て一路バスが総領町に向う車中、竹島講師の予備知識的な総領・田総氏の説明が一段落した時、誰かが田総氏とは全く無縁なことを尋ねた。

「総領町には地酒があるんですか」

ちょっと戸惑った竹島講師が、

「さあ、聞きませんね。総領に地酒はありません」之とまた別の誰かが

「〝総領の甚六〟と云うからきっと甚六と云う酒があるんですよ」と冗談混りで知ったかぶりをした。

これを受けて竹島講師は「総領町は田総村と領家村の合併によって誕生した町で、両村の一字づつを取ったもので、総領の甚六とか、総領息子などの総領とは関係なく、たまたま両村の一字を合わせたまでなのです。」ーとのことだった。

やがてバスは参加者の要望で土産物の買物が出来る場所に一時停車することとなった。ところがあろうことか、田舎町なら仕方がないと思われる寂れた土産物兼酒販店の軒先に〝総領の甚六〟と掲げた地酒の看板があるではないか。誰よりもびっくりしたのは、総領の地酒は甚六だと冗談を言った本人であろう。文字通りのウソから出た真である。

領家八幡社～竜興寺での昼食に続いて午後は川平山城跡～意賀美神社～法福寺などを辿り、水野勝成公ゆかりの光明寺へ、小生自身、大きな期待を持っていただけに光明寺での馬具や駕籠は、それが一見して当時のものと判明がつくだけに貴重な遺物に接した満足感を得るに十分だった。それにつけても馬具のうちの鐙は会員の誰かを見る想いがしてならない。曲った上に捻れたところがーである。ここで誰かなどと無責任な言い方は会員の皆様の名誉の為にもはっきり釈明しておかねばなるまい。斯く申す誰かとは小生に外ならないことを付加えておきます。為念

# 神辺町史跡見学会

**第九回広島県郷土史研究団体連絡協議会主催**

**日時**　八月八日（土）
**受付**　一・三〇～二・〇〇
**場所**　神辺公民館
**見学時間**　二・〇〇～五・〇〇
**内容**　神辺本陣、廉塾、町立歴史民俗史料館、国分寺、迫山古墳群、小山池廃寺
**会費**　一〇〇〇円
**申込方法**　七月十八日までに神谷会長へ

## ※寄贈図書の紹介※

次の三冊を府中市の本山町郷土史会より寄贈していただきましたのでお知らせいたします。

- 備後名刹岩谷山青目寺
  第五十六回御開帳記念
- 郷土史誌もとやま　第十号
  特集・青目寺
- 備後国府跡
  推定地にかかる
  第五次調査概報

★保管先…福山市川口町398－13
種本　実
(0849)54・2047

## 七月例会のお知らせ

**講演＋調査報告＋研究発表**

**『城郭研究部会の集い』**

○**時**　七月十九日（日）午後二時
○**場所**　福山駅サントーク（3階）
　カルチャーセンター
○**会費**　二〇〇円（資料代等実費）
　非会員　三〇〇円
○**内容**
講演「**山城調査の必要性とその方法**」
　部会長　田口義之
調査報告「**久佐村の調査について**」
　副部会長　七森義人
研究発表「**神辺城と藤井一族**」
　部会員　後藤匡史
（午後四時半終了予定）
○**問合せ先**　〒720市内多治米町916
田口義之方℡(0849)53・6157

**中世を読む会**七月例会のお知らせ

**城郭研究部会主催**

○**時**　七月十七日（金）
　午後六時半～八時半
○**場所**　福山市民会館第三会議室
○**テーマ**　「**山内首藤家文書を読む**」
○**会費**　資料代等実費（一〇〇円前後）
◎**事務局**　〒720福山市多治米町九一六
田口義之方
℡(0849)53・6157

**備後戦国ひとロメモ**

## 〃銀山城と杉原盛重〃

福山市山手町に『銀山（ぎんざん）城』と呼ばれる中世山城跡がある。標高二五〇M余の峻険な山頂を利用して築かれたもので、今でも多数の郭跡、礎石、崩れ残った石塁等の遺構を見ることができる。

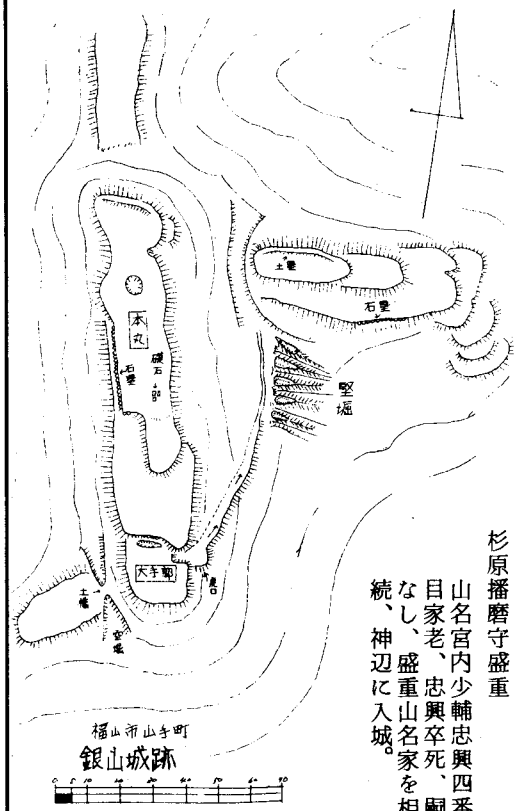
いつ頃、誰によって築かれたかは明白でないが、戦国時代、天文年中（1532～54）には神辺城主山名理興の四番家老、杉原盛重の居城となっていた。

盛重は猛将として知られ、弘治三（1557）年春、主君理興の没後は、吉川元春の推挙によって神辺城主となり、天正九年、伯耆八橋城中で病死する迄、毛利家随一の勇将として活躍する。

（文責　田口義之）

『資料』**備後古城記**

山手村　庄ノ三郎元近
杉原伯耆守山名伯耆守家老。
平貞盛末葉。
同　備前守
杉原播磨守盛重
山名宮内少輔忠興四番目家老、忠興卒死、嗣なし、盛重山名家を相続、神辺に入城。



# 入門―古墳時代の考古学―
## 参加者募集

（後援）福山市教育委員会

一、目的
会員の皆様及び一般の人を含めて古墳に対する理解を深めて戴き、合わせて郷土の古墳を日本の歴史の中に正しく位置付け、今後の学習の指針にして戴く、さらに、古墳に対する保存と活用についても指導的な役割を担なって戴き、当会にも積極的に参加して戴く。

二、内容

| | 月日(曜) | 課目 | 講師 |
|---|---|---|---|
| 一 | 八月一日(土) | 古墳時代とは | 神谷和孝<br>備陽史探訪の会会長<br>近畿大学附属福山高校<br>社会科教諭 |
| 二 | 八月二日(日) | 古墳発生前の墓 | 加藤光臣<br>財団法人広島県埋蔵文化財調査センター主任調査研究員 |
| 三 | 八月八日(土) | 広島県の古墳 | 古瀬清秀<br>広島大学助手 |
| 四 | 八月九日(日) | 古墳時代の人々の生活 | 網本善光<br>笠岡市教育委員会文化課文化係 |

三、時間
十四・〇〇～十六・〇〇

四、会場
サントーク（3階）
カルチャーセンター

五、受講料（資料代等実費）
会員　千円（四回分）
　　一回参百円
非会員　千五百円（四回分）
　　一回四百円

六、定員
三〇名

七、申し込み方法
左記迄往復ハガキで
（定員に達し次第締切ります）

（事務局）
〒720福山市西深津町七―二―七
神谷和孝方
TEL（0849）21・3940

## ごめんなさいの欄

先月号の新入会員の方で、

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため掲載できません。

ゴメンナサイ。

## 編集後記

会報の発行が、仲々思い通りならなくて、7月例会のお知らせが、遅くなりました。

今回は、5月、6月の随筆がメインとなりましたが、来月は何をメインにしようかと今から悩む次第である。内外とも騒がしい時で、皆様には何かと迷惑が掛かるかもしれませんが、よろしくお願いします。

余談ながら、今回、甲奴例会の匿名氏、WXY生氏のWXYは、小学生の頃よく砂の上に書いた（w×y）を思い出し、一瞬ニヤリとしたのは、本当に余談。